

もくじ

市井の仏画師 高屋肖哲 … P1
鎌倉幕府滅亡と足立の板碑 … P3

足立史談

第 659 号

2023 年 1 月 15 日
足立区立郷土博物館内
足立史談編集部
〒120-0001
東京都足立区大谷田 5-20-1
TEL 03-3620-9393
FAX 03-5697-6562

郷土博物館は改修工事のため、休館中です。
令和 5 年 1 月～
令和 7 年 3 月 (予定)

千住に暮らした「狩野芳崖四天王」の一人

市井の仏画師 高屋肖哲

小林 優

近年の調査により、「足立の芸術文化史」は江戸から昭和を通貫するものとして、着実にその厚みを増してきています。今回は、その足立の芸術文化を形成する一人として、大正期の千

住四丁目に暮らした日本画家、高屋肖哲（たかやしやうてつ、一八六六一九四五）について、その経歴と地域に伝来した作品を紹介していきます。■日本画家、高屋肖哲の概略 高屋肖哲は、岡倉覚三（天心）と共に日本画の革新を主導した狩野芳崖（か

す。生家は士族でしたが画家を志し、明治十九年（一八八六）、数え二十一歳で上京して芳崖の門下となりました。同二十一年に芳崖が没したことから、指導を受けた期間は二年余りと短い期間でしたが、この間に芳崖からの薫陶をおおいに受け、さらに芳崖の盟友、岡倉覚三との知遇を得るなど、多くの実りを得ました。師の没後、肖哲は岡倉の勧めを受けて、創設したばかりの東京美術学校（現・東京藝術大学）の一期生として入学します。同期には横山大観

のうぼうがい）に師事し、その高弟の一人として知られた人物です。岐阜県安八郡大垣町（現・大垣市）の生まれで、本名を徳次郎といいますが、生家は士族でしたが画家を志し、明治十九年（一八八六）、数え二十一歳で上京して芳崖の門下となりました。同二十一年に芳崖が没したことから、指導を受けた期間は二年余りと短い期間でしたが、この間に芳崖からの薫陶をおおいに受け、さらに芳崖の盟友、岡倉覚三との知遇を得るなど、多くの実りを得ました。師の没後、肖哲は岡倉の勧めを受けて、創設したばかりの東京美術学校（現・東京藝術大学）の一期生として入学します。同期には横山大観

らがいましたが、肖哲と、同じく芳崖の門下から一期生として入学した岡倉秋水・岡不崩・本多天城は、同期生中でも傑出した存在として「芳崖四天王」と謳われました。明治二十六年（一八九三）に美術学校を卒業後は、石川県工業学校教諭を経て、同三十三年（一九〇〇）に母校の図按科助教に任命されますが、わずかな期間でこれを退き、同三十六年の内国勸業博覧会への出品を最後に画壇の活動からも距離を置くようになります。以降は生涯の画題と定めた仏画の研究に没頭し、自ら「仏画師」と称して、注文に応じて市井の人々に様々な仏画を提供することに重点を置きました。

画壇と距離を置いたことから、公募展などでの活躍とは無縁でしたが、その作品は今日、特に関東大震災罹災後に数年に渡り参籠した高野山の寺院に多く残る他、その下絵や模写など資料類が金沢美術工芸大学に収蔵され、調査が行われています。

■千住の人としての肖哲の記録 この肖哲が千住の人となったのは、おおそ大正時代前半のことであつたらうと推察されます。

現存する肖哲の長男の出生届（明治三十四年）には住居地として東京市下谷区上根岸町とあり、石川県から戻って東京美術学校助教になる頃には下谷に暮らしていましたが、そ



図1 高屋肖哲 《千手観音図》絹本着色 大正～昭和時代初期 千住個人蔵

の後、日本画家の下村観山が記した日記『やまの上』（横浜美術館蔵）には、大正九年（一九二〇）一月に観山を尋ねてきた肖哲の住所として「府下千住町四ノ六五」（現・千住四丁目十九番地付近）と千住の住所が記されています。さらに、肖哲自らが明治三十二年から昭和十七年にかけて、画に関する知見や見聞きした様々なことを綴った手記『雑事抄録』（金沢美術工芸大学蔵）には、大正八年（一九一九）に千住の佐々木庄兵衛という人物から屏風の依頼を請けたという記述もあり、少なくとも肖哲は、

明治三十四年以降、大正八年の頃までには現在の千住四丁目十九番地付近に居を構え、千住の人となっていたと考えられるのです。

■肖哲と千住の人々 また『雑事抄録』には千住の人々との記述が散見され、肖哲が近隣の人々との親交を得て、在地の画家として活動をしてきた姿を浮かび上がらせます。

まず『雑事抄録』中には、大正九年のこととして千住三丁目の屏屋の増田義雄（現在の千住三丁目七十二番地に大正期まであった「たこふじや」の主人）が甲田氏（同じく千住三丁目の「甲田米店」の人だろう）の紹介で七十六歳にして弟子入りを志願してきたとあります。残念ながらこの増田氏は、弟子入り志願の直後に亡くなってしまい、肖哲に画法

を学ぶことはかありませんでしたが、肖哲は千住に暮らすだけでなく、時に応じて近隣の有志に絵を指導する機会もあつたのでしよう。

また『雑事抄録』には、鶯の雌雄を描き分けるのが困難だというのに対して、千住の接骨の名医、名倉家の五代目当主市蔵氏から冬になると自家の庭に鶯の雌雄が来ることを聞いたということなども記録されており、肖哲が近隣の人々と絵のことも含めた様々なことを折に触れて話していたことを窺わせます。

■肖哲画の需要者としての千住 このように、千住に暮らし、千住の人々との親交を得ていた肖哲にとって、この地の人々が、その作品の需要者にもなり得ていたと推察されます。

その代表例が、前述の『雑事抄録』に記録された大正八年に千住の佐々木庄兵衛から依頼された屏風で、この屏風は依頼を請けて後、関東大震災を挟んで昭和十五年（一九四〇）に完成して浅草寺に奉納され、『武帝達磨問答図屏風』として現在も同寺に伝えられています。この屏風を依頼した佐々木庄兵衛は恐らく、大正・昭和初期に千住三丁目地域で医業・薬業を行った佐々木東水氏の家の人かと推測されます。

また、郷土博物館の近年の調査で、特に千住三・四丁目の家々に伝わった資料群の中に肖哲の作品が確認され

ています。冒頭に掲載した『千手観音図』（図1）はそのように千住で確認された肖哲作品の一点です。現在の千住三丁目で大正から昭和初期に砂糖の卸問屋を営んだ商家に伝来したもので、絵絹を下地として、緑の天衣を掛け、数多の脇手に様々な法具を携えた千手観音の姿が精緻に描き込まれ、画面右下に「拝寫肖哲（白文方印「肖哲之印」）（図2）の落款が施されています。確認当初は絵が描かれた本紙を台紙に簡易に貼り付けた「仮巻」の状態であつたことから、肖哲と伝来家の直接のやり取りを通じ、肖哲からもたらされたそのままの形で残されていたものと推察されます。肖哲は「主として諸観音図（大理智観音等）を画きて世上の需者に提供するところ其数大なり（大震災の際下町の分全部焼失す）」（『雑事抄録』）と述べていますが、本作はその

「諸観音図」の一点で、関東大震災を越えて今日に伝えられた貴重な一作である可能性が考えられるのです。

千住に居を構えた肖哲は、大正十二年に関東大震災罹災後しばらく高野山で過ごし、その後も近畿・九州を訪ね歩く生活を送ります。しかし、『雑事抄録』には昭和六年に屏屋増田氏の弟子、河

田幸吉が訪ねて来て話をしたとして「千住町四丁目四十六番地住）昭和六年八月河田氏来談四丁めに住する肖哲家隣家に来談」という記録があります。昭和六年の千住四丁目四十六番地は同年の地番整理によって肖哲が元々暮らした場所の隣、千住四丁目六十六番地に割り振られた新たな地番です。この記述の読み解き方には検討を要しますが、あるいはこの頃、肖哲が再び千住四丁目に拠点となる場を得ていた可能性も考えられるのです。

郷土博物館では、この高屋肖哲を地域の芸術文化史を形成する重要な一人として調査を行っています。その調査は端緒にいたばかりで、千住における活動の実態は未だ謎に包まれています。肖哲の人物・作品のことなど、ぜひ博物館に情報をお寄せ下さい。

【参考文献】『高屋肖哲の新一括資料調査報告書・『雑事抄録』翻刻・画稿類一覧および研究』（金沢美術工芸大学芸術工芸研究所、二〇〇〇年）。

（当館学芸員）



図2 《千手観音図》落款

元徳三年（一三三二）八月九日、年号は元徳から元弘へ改元しているため、同板碑は改元後も旧年号を使



【元徳銘板碑拓影】
尊種子板碑であつたと思われる。
■「元徳四年」銘板碑 伊興源正寺に伝わる板碑に「元徳四年（一三三二）二月四日」銘の板碑（以後「元徳銘板碑」と略称）がある（『足立区文化財調査報告書 板碑編』一九八四年掲載）。同板碑は上部を欠き、サ（聖観音菩薩の種子*註）・サク（勢至菩薩の種子）の下に紀年銘「元徳二年二 四日」を刻んでいる。欠けている上部にはおそらくキリク（阿弥陀如来の種子）が刻まれ、阿弥陀三尊種子板碑であつたと思われる。

鎌倉幕府滅亡と足立の板碑

関口 崇史

改元後も旧年号が刻まれた板碑が存在する。旧年号の使用理由にはいくつかあるが、次に紹介する板碑はどうであろうか。

用した板碑となる。そのため同報告書は「元徳四年は元弘二年である。元徳が元弘に改元されたのを地方ではまだ徹底していなかったのであるうか」と情報伝達の不徹底により旧年号が使用されたと推測している。元弘改元時における朝廷と幕府をめぐる政治情勢を踏まえてあらためて考えてみたい。

て届けられて以降、六波羅から詔書は届けられるようになったものと考えられている。そのため、改元詔書が届かなかつたことを理由に新年号「元弘」を用いず「元徳」を使用し続けたのであるうか。なお、改元詔書の到着にかかる日数は、通常十日前後を要した。最も遅い到着は嘉禎（一二三五）の改元で十九日間、最も早い到着は、康元（一二五六）・正嘉（一二五七）の改元の四日であった。また、板碑の紀年銘に新年号が反映されるには、早くとも一ヶ月程度の期間がかかると指摘されている。区内の板碑でも改元後一か月以内の新年号の事例は確認されていない。

■「元弘」改元と鎌倉幕府 元徳三年（一三三二）五月、吉田定房の密告により、後醍醐天皇の討幕計画が露見する（元弘の変）。八月九日、後醍醐天皇は元弘へ改元、同二十四日、京都を脱出、笠置に布陣したが、九月二十九日、捕らえられ、翌年三月六日、隠岐に流された。一方、朝廷では元弘元年（一三三二）九月二十日、皇太子量仁親王が即位した。光厳天皇である。同十一月、同天皇の即位にともなう改元が議論され、その中で幕府が旧年号（元徳）を使用し続けていることが議論にあげられた。これは元弘の改元詔書が幕府に届けられなかつたためであり、特に問題にならないとされた（『花園天皇宸記』元弘元年十一月廿一日条）。

■「正慶」改元と鎌倉幕府 元弘二年（一三三二）四月二十八日、光厳天皇の即位にともなう改元定が行われ、新年号は「正慶」に決定した。『花園天皇宸記』によれば新年号の選定について、幕府が「長」の字の使用を忌んでいるとの噂があつたため、「正長」が大勢を占める中、「長」の字を避け「正慶」に決定したという（同記同日条）。

寺文書）では依然として「元徳四年」が使用され、「正慶」は正慶元年七月二十九日付「鎮西御教書」（河上神社文書）が初見である。幕府内においても新年号の使用開始にタイムラグ

【表】 鎌倉幕府と年号

| 西暦 | 年号 | 年号 | 改元月 | 年号 | 改元月 |
|------|------|------|-----|------|-----|
| 1331 | 元徳3年 | 元弘元年 | 8 | | |
| 1332 | 元徳4年 | 元弘2年 | | 正慶元年 | 4 |
| 1333 | | 元弘3年 | | 正慶2年 | |

* 太枠は幕府使用年号

が存在していたことが知られるのである。なお、改元直後の九月二日に六波羅探題北方北条仲時が発給した「六波羅御教書」(隅田家文書)のみ「元弘」を使用している。仲時の勇み足であろうか。

元弘・正慶の改元に対する幕府の反応を踏まえ、源正寺所在の元徳銘板碑を考えると、「元徳四年」は元弘改元の反映の遅れではなく、改元所詔書が届けられなかった「元弘」の使用を見送った幕府の方針の反映とみるべきではないだろうか。

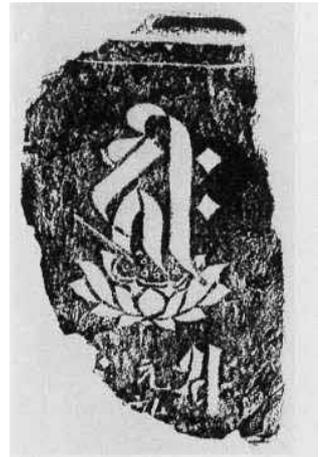
■幕府滅亡と「元弘三年」銘板碑 前述の通り、元徳銘板碑は幕府の元弘不使用の反映であるとするならば、『足立区文化財調査報告書 板碑編』掲載の三基の元弘銘板碑はどのように理解すべきであろうか。三基の板碑は堀之内不動院に二基、宮城地蔵院にそれぞれ伝来する。

残念ながら不動院の二基はいずれも下部を欠き、元弘以下の年月日を欠けており検討から外さざるを得ない。

【不動院板碑拓影1】



【不動院板碑拓影2】



そこで宮城地蔵院の板碑について考えてみたい。

現在、地蔵院の元弘銘板碑は、他の三基の板碑とともに縦横二列で固定されている。前列右が該当の板碑である。

【地蔵院板碑全景】



同板碑は上部を欠き、紀年銘「元弘

三年十月 日」のみ刻まれている(以後「元弘銘板碑」と略称)。

【元弘銘板碑】



【元弘銘板碑拓影】(右写真の板碑)



■「元弘三年」が意味するもの 前述の通り、元徳銘板碑が元弘を使用しなかった幕府の方針の反映であるならば、なぜ、元弘銘板碑が存在するのか。正慶二年五月二十一日、新田義貞による鎌倉攻めにより、翌二十二日、東勝寺において北条高時が一族とともに自害、鎌倉幕府が滅亡する。同二十五日、隠岐から脱出した後醍醐天皇は、伯耆において光厳天皇の廃位と正慶を廃し、年号を元弘に復することを宣下する。後醍

醐は、光厳の即位自体を認めなかったため、光厳の即位改元の「正慶」も認めなかった。このような状況下で元弘銘板碑は造立されたのである。つまり、同板碑は、鎌倉幕府の滅亡と後醍醐天皇の復活が足立にもたらされたことを明瞭に物語る貴重な文化財なのである。

(足立区文化財調査員)

*註 種子(しゅじ)：密教において仏菩薩を表す梵字のこと。

【参考文献】

千々和到『板碑とその時代』(平凡社、昭和六十三年)
北爪真佐夫『文士と御家人』(青史出版、平成十四年)

【訂正】前号
六五八号「レー
マン兄弟と
京都」「図1
レーマン関係
の京都」にて、
京都南座の位
置は正しくは
鴨川・四条大
橋を渡った南
側でした。(下
図)訂正いた
します

